活　動

全国町村会

都市・農村共生社会創造シンポジウム2018を開催

～「インバウンド」ー新しい価値発見者ーをテーマに議論～

全国町村会は、9月15日、東京都内で「都市・農村共生社会創造シンポジウム2018」を開催した。今回のシンポジウムは、全国町村会が2015年7月から開催しているシンポジウムの10回目にあたる。当日は全国各地から100名を超える参加者が、登壇者の発表と議論に熱心に耳を傾けた。

主催者の全国町村会 武居事務総長から、本会では、この度、新たな報告書「これからの地域づくりと農村価値創生～観光・交流をてがかりとして～」（6頁参照）を公表するにあたり、「田園回帰・インバウンドと農山村～新しい価値発見者と地域づくり～」と題して今回のシンポジウムを企画した。

報告書では、これからの日本と地域のあり方について、田園回帰や農山漁村との結びつきの関係人口、農山漁村に向かうインバウンドなどを「新しい価値発見者」として位置づけ、新たな視点からこれからの地域づくりをしていくことで可能性が大きく広がるのではないかのメッセージを込めている。

限りあるパイを奪い合うのではなく、手を携えて困ったときは助け合う。「競う社会」から「共に創る社会」への転換を農山漁村の地域づくりから進めていく先に、都市との共生による永続的な地域づくりや新たな価値創生がつながっていくと挨拶した。

▶全国町村会 事務総長　武居丈二

基調報告

1.「観光・交流とインバウンド」

株式会社美ら地球 CEO　山田 拓 氏

同氏は、外資系コンサルティング会社を退職し、足かけ2年をかけて世界各国をめぐり、飛騨市古川に移住。外国人向けの田舎での体験ツアーの会社を始める。サイクリングツアーでは現在年間4千人が利用し、うち8割が欧米豪の外国人で、満足度は最高レベルである。

同氏は、地元での当たり前が旅行者・移住者にとっては宝であるとし、「地元の人は地域の宝の発見をしてほしい」と提案し、「宝の原石は身の回りにある」と発言した。

外国人が熱中するのは田舎の普通の風景であると指摘。整備された田んぼや子供の通学姿とあいさつにも驚嘆し、道端にいるアマガエルが一番の人気者であると紹介した。飛騨に来る外国人が求めているのは農村・田園の風景であり、何気ない風景が「宝」になると指摘した。

そして、インバウンドツーリズムは、これからは、量から質の時代となり、一人ひとりのニーズにきちんと対応しないと生き残れないと発言した。

このほか、宿泊施設を整備するなど観光客の滞在時間を延ばし、できるだけ多くのお金が地域に落ち、それが域内で循環するシステムを作ることが重要だと実例を挙げて指摘した。

最後に、地元の満足が何より大事であるとし、住んでよしのために、訪れてよしがあると述べた。

▶株式会社美ら地球 CEO　山田 拓 氏

2.「観光・交流と田園回帰」

合同会社とびしま 副代表　松本友哉 氏

同氏は、大学で建築・デザインを専攻。東日本大震災を契機に「緑のふるさと協力隊」に参加。山形県唯一の離島である飛島に派遣され、その後移住。

▶合同会社とびしま 副代表　松本友哉 氏

同じころUIターンで飛島に来た若者4人で「合同会社とびしま」を設立。飛島の良さを伝える活動に従事する。

同氏は、田園回帰の理由として、「おいしいものを食べたい」、「濃厚な体験をしたい」、「仕事・チャンスがほしい」があるのではないかと発言。また、観光と移住の間に「関係人口」があり、見るだけでは飽きるが、住むのはしんどいと思う人たちではないかと指摘。そのため、同社では、「島ターン」と称して一週間の体験移住も実施しており、毎年10名程度の参加者があることを報告した。

このほか同社では、「0次産業」と呼び、「島の風景を守る」活動を展開。草刈りや除雪、海岸の清掃等に汗を流していることを紹介した。

今後の抱負として、「飛島の人口は現在200人で平均年齢70歳。20年後に島の人口が0にならないよう、我々世代こそ100人の人口維持を目指して頑張っていく」と発言した。

最後に、農山漁村の未来は、お金を稼ぐことと切り離し、「風景（豊かな暮らし）を生産すること」だと述べた。

3.「これからの地域づくりと農村価値創生」

全国町村会 事務総長　武居丈二

武居事務総長は、はじめに、他の地域と競合しない個性（魅力）を磨き、お互いに連携することで地域の再生と新たな価値を創造することが重要だと言及し、このためには、「人」がキーワードになると指摘した。

また、地域づくりの土台となる地域の基盤（安全・安心や心の豊かさの源泉となる美しさ、うるおいなど）がどこでも一定の水準で確保されていることが重要であり、その上に地域をみがき、多様な連携・協力が行われること。この二つの行動の調和が重要だと強調した。例えば、日本の世界遺産の多くが農山漁村にあるが、これは先人からの地域のくらしを連綿と守り育ててきたことの結果が世界から評価されたのであり、評価のための活動をめざしたのではない。農山漁村には世界基準の「宝」がまだまだ眠っていると指摘した。

さらに、「日常の場」を、開かれた「関わりの場」にしていくことが重要であり、このような場において「新しい価値発見者」と地域住民たち「地域みがき士」が出合い、地域づくりが循環・発展していくことが必要と言及した。

最後に、人口減少時代のわが国において、人口を、全く同じ価値の「1」という数値の積み上げとしてとらえるのではなく、一人ひとりの価値は、これを増やし輝かせることができるという理念のもと、その価値の総和を増やす国づくりがこれから求められる。農山漁村の究極の価値創生は、農山漁村の現場を起点にわが国に貢献する、地域を越えて輝くひとづくりといえると強調した。

㈲咲楽 代表取締役　内田咲子氏

パネルディスカッション

引き続き、「新しい価値発見者と地域づくり」をテーマにパネルディスカッションを行った。コーディネーターは明治大学農学部教授の小田切徳美氏、パネリストは、基調報告をした山田氏と松本氏に加え、島根県奥出雲町を拠点に活躍する有限会社咲楽 代表取締役の内田咲子氏が務めた。

内田氏は、2度の海外経験からふるさと奥出雲の良さを再発見し、地元に戻り家業を手伝うとともに、有限会社咲楽（さくら）を創業し、奥出雲の良さを内外に発信するなど地域おこしに奮闘中である。また、同氏は、地元の「たたら製鉄」は、ものづくりの原点であり、先人の知恵、自然への畏敬、人と自然との共生を教えてくれると発言。そのほか、奥出雲は鉱山の跡地を棚田にしている世界でも珍しい地形で、国の重要文化的景観に選定されていると紹介した。

まず小田切氏から、「皆さんにとって、農村価値とは何か」との質問からスタートした。山田氏は、「①田舎であること、②空間があること、③自然が近い、④食べ物・水がおいしいこと」を挙げ、「人とのつながりなど、面倒くさい人間関係」もあるが、それが農村価値と発言。松本氏も、農村価値とは、「かっこいいと面倒くさいが同居しているところ」、「非効率なところと人間関係が濃厚なところ」と述べた。内田氏は、農村の価値とは、「自然に生かされているところ」とし、都市に住む人間は、自分が自然の一部であることを忘れていると発言した。

次に小田切氏から、今後の農山漁村へのインバウンドや関係人口のあり方等について発言を求められ、山田氏は、これからのインバウンドは、「一人ひとりの見極めが大切」と指摘し、一気

明治大学農学部教授　小田切徳美氏

活　動

に拡大せずに小出しにしていった方がいい人が来ると発言した。松本氏は、「若者や外国人がテクノロジーの発展によって、簡単に田舎とつながるようになった」ことを挙げ、このような中では「人と人、人と企業のつながりが重要」と指摘した。内田氏も、「価値を分かってくれる人が来てくれることが重要」と述べた。

さらに小田切氏は、インバウンドに必要なものは何かと質問し、山田氏は、「日本が好きで意欲のある良質なガイド」と発言。ガイドは知識があるだけではだめで、わかりやすく、楽しくゲストの立場に立って対応することが必要だと述べた。松本氏も同様の発言をし、「一年以内に旅行会社を設立し、ガイド等の事業を行う予定」と述べた。このことに関し、内田氏からは「大きくすると良質なガイドは育たない」との発言があった。

続いて小田切氏から、農村価値の利活用で、実際に行動している人を表現するならばとの問いに、山田氏は、「目減りさせない人」と発言。活用はするが目減りさせず、豊かなライフスタイルを切り出して、利益を少しだけいただくことだと説明した。松本氏は、「農山村を生産する人」と表現。内田氏は、「地域を外の人に知ってもらいたいとの一念で行動している人」と表現した。

最後に小田切氏は、皆さんは農村価値とどう向き合っているのかとの問いかけに、山田氏は、地域の良さが農村価値であり、「地域とともに生きること」と発言。地域がそこにあり、それがかけがえのないものと述べた。松本氏は、「農山漁村を生産すること」と述べ、「消滅させてはいけない」と強調した。内田氏からは、生まれた土地がたまたま農山村だった。「そこがなくなると幸せに生きた証が残せない」と回答。それぞれが農村価値への深い思いを語った。

まとめとして、小田切氏は、農村価値について3つのことが確認できたとし、1つ目は、「農村価値とは、①非効率、②面倒くさい、③繋がっている、④それぞれが見える社会」であるとし、一方で、グローバリゼーションの流れの中で、日本の農村価値がかなりユニークなものであると確認できたとした。2つ目は、「農村価値の関わり」で、接点として「良質なガイド」が必要であること。そこでは、コミュニケーション能力や人間性を問われ、知識だけではなく本物が求められているとした。一方で、今後は「多様な組織」が求められるとした。3点目は、「農村価値の新しい基盤」で、共通の基盤が必要であるとし、今後は、「個性あふれる内発的発展」と「均衡ある発展」の二兎を追うことが必要であり、そこにこそ政策の出番があると総括した。

なお、茨城県五霞町の関根美帆氏がグラフィックファシリテーションにより、発言者の要旨等を会場のホワイトボードにライブ中継で図式化（見える化）し、ディスカッションをサポートした。（左参照）